岩手大学教育学部研究年報　第58巻第1号（1998.10）81～92.

小学校における新教科の研究開発動向について（3）

藤　岡　秀　樹*

（1998年6月30日受理）

1　はじめに

小学校の「研究開発学校」の研究の中で，筆者が関心を持ち，注目した実践の代表的事例として，これまで福島大学教育学部附属小学校と東京学芸大学教育学部附属大泉小学校の実践を紹介し，分析を行った。

福島大学附属小学校の実践（藤岡，1996）は，「特別活動」を廃止し，各教科と「道徳」で教育課程を構成し，教科内容と名称の変更を行ったものである。その特徴としては，①全学年にわたって「図画工作」と「音楽」を廃止して「表現科」を新設した，②中学年以上で「理科」「社会」「家庭」を廃止し，「人間科」「地球科」を新設した，③開発された新教科のみならず，既存の教科についても，内容の絞り込み，精選化が見られた，④教科，学年によって1単位時間の弾力化を図った――の4点が見いだされた。

東京学芸大学附属大泉小学校の実践（藤岡，1997a）は，教科の統合や新設といった教育課程の領域の再編ではなく，「総合学習」を全学年にわたって設定したものである。その特徴としては，①各教科の精選を通して時数を縮減し，「総合学習」の時間を確保している（低学年では「生活科」を含んだ形態で週当たり4時間，中学年以上で週当たり2時間），②「総合学習」の内容は，「国際」「環境」「人間」の3領域から成っている，③「総合学習」は体験重視，問題解決型の学習形態をとっている――の3点が見いだされた。

本論文では，「研究開発学校」の内，上述の2校とは異なった視点で研究を進めている福岡教育大学教育学部附属福岡小学校の実践を紹介し，分析を行うことにしたい。

2　福岡教育大学附属福岡小学校における研究開発

福岡教育大学附属福岡小学校は1994年度から1996年度までの3年間にわたって，文部省の「研究開発学校」の指定を受け，研究を推進してきた。三石（1996）の分類では，第1のタイプ（教科統合による新教科設置の試み）と第2のタイプ（「生活・活動」を柱にした教科による再編）を併せたものに位置づく。以下に紹介する内容は，福岡教育大学附属福岡小学校（1997a，1997b）に基づいている。

(1)教育課程の基本方針

福岡教育大学附属福岡小学校は，子どもの認識活動を①具体的感覚活動，②抽象的思考活動，

＊　岩手大学教育学部

表1 福岡教育大学附属福岡小学校の教育課程
（年間授業時数；1997年度）

区分		1年	2年	3年	4年	5年	6年
各教科学習	国語	238	245	210	210	175	175
	算数	136	175	175	175	175	175
	生活	102	105				
	生活環境			210	210		
	社会					105	105
	理科					105	105
	家庭					70	70
	表現	136	140				
	音楽			70	70	70	70
	図画工作			70	70	70	70
	体育	102	105	105	105	105	105
領域「人間」		68	70	70	70	70	70
クラブ					35	35	35
総授業時数		782	840	910	945	980	980
現行総時数との差		−68	−70	−70	−70	−35	−35

③表現的行動活動—の3つに分けて捉えている（福岡教育大附属福岡小，1997a）。そして，①具体的感覚活動を基盤とする教科群として，「生活科」「生活環境科」「理科」「社会」「家庭」を，②抽象的思考活動を基盤とする教科群として，「算数」「国語」を，③表現的行動活動を基盤とする教科群として，「表現科」「音楽」「図画工作」「体育」を設定している（福岡教育大附属福岡小，1997b）。さらに，これらの教科全体を支え，総合的に人としての在り方，生き方を考える領域として「人間」を設定している。

1997年度の教育課程（年間授業時数）を表1に示す。表1から，総授業時数に関しては，一般公立校よりも福岡教育大学附属福岡小の方が少なくなっていること（低・中学年では70時間，高学年では35時間の削減）が見いだせる。教科の再編としては，低学年では「音楽」「図画工作」を廃止し，「表現科」を新設し，中学年では「理科」「社会」を廃止し，「生活環境科」を新設している。さらに，「特別活動」と「道徳」を廃止し，「特別活動」の中で主として「学級活動」に関する事項と「道徳」を統合して，週当たり2時間配当の“領域「人間」”を新設している。

次に，学校教育法施行規則第24条の2に定められている各教科の授業時数と比較してみよう。「算数」「生活」「音楽」「図画工作」「体育」は一般公立校と同じ時数である。低学年の「表現科」の時数は，低学年の「音楽」と「図工」の時数を足したものとなっており，中学年の「生活環境科」の時数は，中学年の「理科」と「社会」の時数を足したものとなっている。他方，縮減の見られた教科は「国語」であり，どの学年でも約20%縮減されている（低・中学年では週当たり2時間，高学年では週当たり1時間）。現行の「表現」「理解」の2領域を見直し，言葉と積極的に関わり情報を操作する過程を重視した内容の再構成を行い，重複する内容は統合し，内容を削減したからである（福岡教育大学附属福岡小，1997a）。「研究開発学校」の内で新教科を創設したり，「総合学習」を採り入れたりしている学校の授業時数を比べてみると，縮減

率の大きい教科としては，総じて「国語」を挙げることができる[1)]。

(2)各教科の概要

「算数」「国語」などのこれまでも設定されていた教科においても，少なからぬ変容がみられるが，本稿では紙幅の都合上，研究開発された新教科・領域に限定して概要を紹介することにしよう。

A.「表現科」

「表現科」の目標は，次のようになっている。

> 多様な表現活動を通して，豊かな感性と創造性の基礎を培うとともに表現する喜びを味わわせる。

多様な表現活動とは，子どもが言葉，声，動き，音，材料などの表現素材や，言語，身体，音楽，造形などの表現方法を単独的・複合的・総合的に取り入れて思いを表していく活動のことを指している（福岡教育大学附属福岡小，1997a)。また，「表現する喜びを味わわせる」ということは，自分の思いを表現していく過程そのものに浸りきる満足感や結果として表現できた達成感など生きる喜びにつながる快の感情を味わわせることだと説明されている（福岡教育大学附属福岡小，1997a)。

福島大学教育学部附属小（福島大学教育学部附属小，1995a，b；藤岡，1996）や錦華小（丸山ら，1996）では，全学年にわたって「表現科」が設けられたが，福岡教育大学附属福岡小では低学年に限定して，「表現科」を新設している。その理由は何であろうか。福岡教育大学附属福岡小（1997a）によれば，低学年児童本来の表現特性に応じ，発達課題を保障するためであるとされている。つまり，低学年児童の発達課題は，全感覚機能を総合的に育てることにあり，そのためには多様な表現活動の経験を単独的・複合的・総合的に豊かにしていく必要がある。また，低学年児童の表現特性としては，①内発性（本能的な表現欲求を有する)，②全身性（全感覚機能を働かせて表現する)，③未分化性（生活表現と想像表現が未分化)，④自己本位性（自分本位の表現に浸りきる)，⑤多様性（様々な表現方法を複合的・総合的に取り入れる)――の5つを挙げている。これまでの「音楽」「図画工作」という教科の枠では，表現に限界をきたし，子どもの多様な表現活動を保障することが困難になるので，新たに「表現科」を設定したということになる。

では，「表現科」の単元はどのようなものであるか，具体的に紹介しよう。表2には第2学年の年間計画を示す。表中の「内容」欄のA-1は“表現遊びの内容”，A-2は“音楽・造形を中心とした内容”，B-1は“なりきり表現”，B-2は“劇的表現”，C-1は“よさや楽しさなどを体全体を働かせて感じ取る内容”，C-2は“表現されたもののよさや楽しさを味わう内容”を示している。表2からも分かるように，音楽や造形に留まらず，身体表現や言語表現なども含まれており，複線型の教材も含まれている。題材は福島大学附属小の実践（1995a，b）とは異なっていても，表現方法の多様さ・豊かさでは共通点が見られる。

学校公開時（1997年度）の実践『あめくん，にじさん，こんにちは』（1年）を取り上げて検討してみよう。本実践は5時間配当で，「感じる」段階（2時間）では，「雨の日のお話」を聞い

表2 「表現科」の年間計画の例（2年生）

	題材名	ねらい	内容
4月	1. 春の花たちのパーティ (4)	・桜やチューリップなどの春の花たちに思いを寄せ，絵，詩や文などで表すことができる。	A-2 C-1, 2
	2. 明るいうたごえひびかせて (4)	・春に関する歌や楽しい友達との集いの歌を歌ったり，踊ったりすることができる。	A-2 C-1, 2
5月	3. 紙テープをゆうぐにつけてみると (4)	・紙テープなどをもとに，身近な遊具との関わりながら表現遊びを楽しみ，遊んだことを絵や文で表すことができる。	A-1 C-1, 2
	4. みんなにもおしえてね (4)	・楽しかったことや心に強く残ったことを楽しいカードや手紙にして，友達に伝え合うことができる。	A-2 C-1, 2
	5. リズムの国であそぼうよ (4)	・リズムの国の飾りをつくったり，リズム模倣やリズム問答をしたりして，即興的にリズムをつくって表すことができる。	A-1 C-1, 2
6月	6. 雨つぶたちの大ぼうけん (8)	・雨粒が大冒険していく様子を豊かに想像し，動き，言葉，飾り，音などで楽しく共同的に表すことができる。	B-2 C-1, 2
	7. ねん土でなにができるかな (4)	・粘土に親しみながら形を考えたり，材料を付け加えたりして，思いのままに立体に表すことができる。	A-2 C-1, 2
	8. 楽しいな！うたのおいかけっこ (4)	・簡単な輪唱に親しみ，楽しく歌うことができる。	A-2 C-1, 2
7月	9. もしも空をとべたなら (8)	・鳥などになりきって，空を飛んだ様子を豊かに想像し，動き，飾り，声，音，歌などで楽しく共同的に表すことができる。	B-1 C-1, 2
	10. すきないろとせんのお話 (4)	・好きな水彩絵の具を使っていろいろな線を描き，できた形から想像的なお話をつくることができる。	A-1 C-1, 2
9月	11. ようこそ！わくわくマリンワールドへ (8)	・教室を水族館に見立てて飾ったり，水族館の魚たちの様子を動き，飾り，音などで楽しく共同的に表すことができる。	B-1 C-1, 2
	12. リズムにのってタン！タン！タン！ (4)	・タンブリン，ウッドブロックなどの打楽器に親しみ歌ったり，リズム伴奏をすることができる。	A-2 C-1, 2
10月	13. きれいなふくをもらった虫さんたちの人形げき (6)	・透明材料をもとに，想像的な虫やお話をつくり，舞台となる場や音をつくりながら楽しく共同的に人形劇で表すことができる。	B-2 C-1, 2
	14. うつしてあそんでそれからそれから (4)	・様々な型押し版の材料に親しみながら版遊びを楽しみ，思い付いたことを絵に表すことができる。	A-1 C-1, 2
	15. スイミーのものがたりのつづきはどうなるの？ (10)	・スイミーの物語の続きをつくり，登場物になりきって動き，言葉，飾り，音などで楽しく共同的に表すことができる。	B-2 C-1, 2
11月	16. つつんでしまえばこっちのもの (6)	・身近な道具や物などを大きな紙で包んだり，飾ったりして思いついた表現遊びをすることができる。	A-1 C-1, 2
	17. 秋をみんなであらわそう (8)	・秋の自然の様子から想像して，動き，言葉，音，絵飾りなどで楽しく共同的に表すことができる。	B-2 C-1, 2
	18. 音のサラダもおいしいよ (3)	・好きな音を探してつないだり，リズム，強弱などを工夫して即興的に表すことができる。	A-1 C-1, 2
12月	19. 花と鳥と風と月のお話のはじまり―はじまり― (8)	・花と鳥と風と月を主人公にした物語をつくり，その様子を動き，言葉，音，飾りなどで楽しく共同的に表すことができる。	B-2 C-1, 2
	20. ひらいてむすんでつないでみたら (3)	・箱を切り開いたり，つなぎ合わせたり，ひもなどで結んだりしながら，思い付いた表現遊びができる。	A-1 C-1, 2
1月	21. できたらいいな！ こんなこと (5)	・自分が想像した夢や願いを思いのままに絵や立体に表し，想像的なお話をつくって表すことができる。	A-2 C-1, 2
	22. 雪さんとどうぶつたちがであったら (9)	・雪と動物たちが出会った様子を想像し，動き，音，言葉，飾りなどで楽しく共同的に表すことができる。	B-2 C-1, 2
2月	23. みんなあつまれ！ねん土ゆうえんち (3)	・粘土に親しみながら楽しく乗り物を立体に表し，共同的に遊園地をつくることができる。	A-2 C-1, 2
	24. みんなでがっそう楽しいな (5)	・「こぎつね」「トルコ行進曲」などの鍵盤楽器，打楽器を中心とした楽曲を楽しく合奏することができる。	A-2 C-1, 2
3月	25. ミュージカル「はだかの王様」 (10)	・「はだかの王さま」をもとに，登場人物になりきって歌い，動きや飾りなどを工夫して音楽劇を表すことができる。	B-2 C-1, 2

て，森の登場物を表す活動を行い，「表す」段階（2時間）では，森の登場物が雨や虹に出会うお話や音づくり，絵に表すなどの表現遊びを行わせ，「味わう」段階（1時間）では，友達の表現遊びと交流をさせている。2名の教師によるティーム・ティーチングで進められ，活動の場の多様さや表現方法の多様さに対処している点は望ましい指導法であろう。しかし，参観時の子どもの表現内容や方法は極めて多様であり，また1年生という年齢から考えてみても，授業への取り組みの意欲や態度，表現能力・技能に個人差があり，2名の教師によるティーム・ティーチングでも十分に支援しきれていない感じがした。お話カードの作成などでは，「国語」の授業との関連についても検討しなければならないと思われた。

B.「生活環境科」

「生活環境科」の目標は，次のようになっている。

> 自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，具体的な活動や体験を通して，環境構成者としての主体的な見方・考え方を養い，生活環境とのよりよい関係をつくっていこうとする実践的な態度を育てる。

「生活環境科」の目標を一読すれば分かるように，「生活科」の教科目標に似ている。「生活環境科」は，活動や体験を重視した「生活科」の趣旨を生かし，その延長線上に位置づけられていると言えよう。中学年の「理科」「社会」では，地域や身の周りの事項を学習することが多いので，両科の統合も可能であろう。しかし，この教科目標をみると，「生活環境科」の設定の趣旨は，両科の統合とは少し異なる。

福岡教育大学附属福岡小（1997a）によれば，①自分が生活している身近な環境の中での自分自身の生き方や在り方を考えさせ，自分が生活している環境へ主体的に関わっていこうとする態度を育てていく教科をつくる必然性と，②もっと生活に密着した，子どもが調べることに興味が喚起されるような，また，学習したことを生かしていける内容が求められている――の2点を設定の理由に挙げている。①は，子どもたちを客観的に捉えていく学習者ではなく，主体

表3 「生活環境科」の内容

A．生命	身近な動植物を育てたり人の体を調べたりして，その活動や成長の様子をとらえ，動植物や人の生命を大切にすることができる。
B．季節・自然	身近な自然を観察したり四季の行事に参加したりして，地域の自然環境と動植物や人との関係をとらえ，環境を守ろうとすることができる。
C．健康・安全	健康で安全な生活を営むための仕組みやきまりを調べ，それらをうまく利用してよりよい生活を願うことができる。
D．地域の歴史・文化	地域の歴史や伝統，文化を調べ，自分たちもそれらを守ったり一緒に参加したりすることができる。
E．社会的奉仕	地域での奉仕活動の様子を調べ，進んで自分たちも参加・協力することができる。
F．生産・消費	地域の環境を生かした生産活動の様子や自分たちの消費活動の様子を調べ，地域の人々や自分の生活に役立つように工夫することができる。

表4「生活環境科」の年間計画の例（3年生）

	単元名	ねらい	内容
4月	1. わたしの町づくりⅠ (28)		A・B
	①荒津ウォークラリーをしよう1	○自分たちの学校の周りの様子に関心をもち，調べたい内容を明確にすることができる。	C・D E・F
5月	②花いっぱいの町にしよう1	○地域を花一杯にするために，植物の成長に必要な土作りを行い，花を植えることができる。	B・E
	2. 季節にあった生活づくりⅠ		
	①生活の中の音について考えよう (20)	○生活の中で音の働きについて調べ，音を通して自分の生活をよりよくすることができる。	C
6月	②夏の虫と仲良しになろう	○虫の成長や活動の様子を調べ，自分の生活の中で楽しく育てることができる。	A・B
	3. わたしの町づくりⅡ (13)		
	花いっぱいの町にしよう2	○花の設置場所を吟味・決定し，地域の人々と一緒に花いっぱいの町にすることができる。	B・C E
7月	4. 季節にあった生活づくりⅡ (11)		
	夏を楽しくする道具を作ろう	○夏を楽しく過ごすために，水や空気の性質を使ったおもちゃを作ることができる。	B・C
	5. わたしの町づくりⅢ (42)		
9月	①草花や野菜を育てる土作りをしよう	○草花や野菜を育てるときに必要な土作りを自分たちで行うことができる。	B・C
	②とよのか苺を育てよう	○農家の苺作りを調べ，自然とのかかわりを捉え，自分の苺栽培に生かすことができる。	B・F
10月	③買い物作戦をしよう	○これからの買い物に関心をもち，品質・価格や環境保全や資源保護を考えた買い物ができる。	E・F
	6. わたしの町づくりⅣ (30)		
	①荒津ウォークラリーをしよう2	○地域に残る伝統的な祭りや楽しい催しを調べ，探検マップに表現することができる。	B・D
11月	②地域の祭りに参加しよう	○地域に残る伝統的な祭りを調べ，祭りの意味を考えて楽しく参加することができる。	B・D
12月	7. 季節にあった生活づくりⅢ		
	①寒さに負けない工夫をしよう (34)	○太陽の光の性質を明らかにするとともに，光を活用した冬の過ごし方を考えることができる。	B・C
1月	②自分たちの体について考えよう	○体を大切にする心情や生物を愛護する態度を身に付け，冬の過ごし方を考えることができる。	A・B C
2月	8. わたしの町づくりⅤ (32)		
	①荒津ウォークラリーをしよう3	○地域の変化と発展を関連付けてとらえ，自分たちの地域のよさを再発見することができる。	B・C D
3月	②きれいな町をつくろう	○磁石の性質を使ってきれいな町にするとともに，自分たちの町を自慢することができる。	C・E

A；生命，B；季節・自然，C；健康・安全，D；地域の歴史・文化，E；社会的奉仕，F；生産・消費

的な環境構成者，主体的な生活者に育てあげることを意味している（福岡教育大学附属福岡小，1997b）。客観的に捉えていく学習者であることが何故だめなのか，十分な説明がなされていない。「生活環境科」は，「生活科」を中学年まで拡張したものであり，「生活科」では認識するという段階まで到達することが期待されず，主体的な分かり方を意味する“気付き”が重視されている点を併せて考えてみると，ある程度この考え方が理解できる。しかしながら，中学年での自然認識や社会認識の形成を軽視するような捉え方は問題があるだろう。さらに，「実践的な態度を捉える」という記述も態度主義に陥る危険性が強く，問題であろう。

では，「生活環境科」の内容を紹介してみよう（表3参照）。内容は，①生命，②季節・自然，③健康・安全，④地域の歴史・文化，⑤社会的奉仕，⑥生産・消費の6領域から成っている。「生活環境科」の単元はどのようなものであるか，具体的に紹介しよう。表4に第3学年の年間計画を示す。表3・4から分かるように，「生活環境科」は単に「理科」「社会」を統合したものではなく，奉仕活動や健康教育なども含まれおり，従来の中学年で学習する「理科」「社会」の内容をかなり絞り込んでいる。はたしてこれでいいのか疑問である。奉仕活動や健康教育などは，むしろ「総合学習」の時間で実施した方が効果があがるのではないだろうか。

授業実践例（福岡教育大学附属福岡小，1997b）を取り上げて検討してみよう。『花いっぱいの町にしよう1・2』（3年）は21時間配当で，②季節・自然と⑤社会的奉仕に関わる単元である。第1期（8時間）では，学校周辺の花の設置場所の調査を実施し，花いっぱい運動への参加を決定し，土の様子を調べたり，育てようとする花に適した土を作り，花を植えたりしている。第2期（13時間）では，育てた花をまず学校周辺に設置し，設置場所を吟味する。その後で，地域の人々へのお願いの手紙を書き，決定した場所へ花を設置するという授業の流れである。地域探検を通して地域社会をある程度知ることができても，花の観察や栽培については十分な時間が充てられてはおらず，自然認識の深まりはあまり見られていないように感じられる。地域社会の人々と共に，生活環境をよりよくするための運動に参加することや地域に住む人々との交流がねらいになってしまい，自然認識のみならず社会認識の視点から見ても，問題のある実践のように思われる。

C．領域「人間」

領域「人間」の目標は，次のようになっている。

> 人間としてのよりよい生き方を求め実践する活動を通して，人間性豊かに生きる実践的な態度を育てる。

「人間の生き方・在り方」という「心の教育」の中核を担う「道徳」と「特別活動」（特に学級活動）との一体化を図った総合的な学習として，領域「人間」が設定された。両者の一体化の必要性の理由としては，次の2点が挙げられている（福岡教育大学附属福岡小，1997a）。

①これまでの「道徳」の時間の学習は「自己の価値観の振り返り」に重点がおかれ，価値観の形成は個人の体験に委ねられていたが，子どもの豊かな道徳的体験が希薄化している今日，価値形成の過程に具体的活動や道徳的実践を位置づけた総合的な学習が必要である。

②豊かな社会的・集団的体験を通して，人間としての自分の生き方・在り方を考えていく教育が必要である。

表5 領域「人間」の内容

学習の対象	学習の内容
豊かに生きる自分（自分）	人や自然とふれあう喜びを感じ，共生の生き方を志向する豊かな自分に気づき，自信をもつ心の振り返り
学級や学校の友達（仲間）	学級や学校の仲間との連帯感や学び合う喜びを実感し志向する対話，協働，協同製作などのふれあい
命を輝かせる人や自然（生命）	生命の尊さを実感する動植物の育成，家族との対話，命を輝かせる人との対話などのふれあい
老人や障害がある人（福祉）	老人や障害のある人に真心をもって接したり，相手の命を実感する対話，協同製作，表現（劇や歌の発表），介護などのふれあい
異文化に生きる人（国際理解・協力）	異文化圏の国の文化のすばらしさを実感し，自立を支援する異文化体験（遊び，料理，外国語による交信），対話，支援活動などのふれあい
人の生き方を問う環境（環境）	生命の共生，環境を保全しようとする人の願いを実感する，自然体験（生き物が共生する水田，川にひたる），対話，協働のなどのふれあい

領域「人間」の目標を考える際に，重要なキーワードは「共生」である。福岡教育大学附属福岡小（1997a）は，この「共生」を，かけがえのない自分とかけがえのない他者を感じ，双方が共によりよく生きていくことと捉えている。領域「人間」の内容は，「どのようなもの・人・こととどのように共生していくか」という実践の在り方から規定される。次に，領域「人間」の内容を紹介してみよう（表5参照）。「共生」の対象は，①仲間—友達や教師との「共生」，②生命—人や自然の命との「共生」，③福祉—老人や障害のある人との「共生」，④国際理解・協力—外国の人・異文化との「共生」，⑤環境—人や自然との「共生」の5つから成り立っている。この5つの「共生」を通して，豊かな自分をつくることがねらいである。

表6に第3学年の年間計画を示す。中学年では「福祉」の内容が多いが，その理由としては，他者に対する推し量りの能力が発達し，障害がある人に対する偏見・先入観があまり作られていない中学年に多く配当するのが適切であるとされている（福岡教育大学附属福岡小，1997a）。紙幅の都合上，年間計画は割愛するが，高学年では複数内容を複合化した授業の形態になり，「福祉」「環境」は時数的には中学年よりも減少し，総合的に「福祉」「国際理解・協力」「環境」の内容を学習するようになっている。

学校公開時（1997年度）の実践『小山さんのホスピスでふれあおう』（6年）を取り上げて検討してみよう。本実践は8時間配当で，「感じる」段階（5時間）では，ホスピスでのボランティアの在り方の話し合いを行っている。ボランティアで大切なことやホスピスでできることを話し合い，実際にボランティア体験を行っている。「考える」（2時間）では，末期癌を宣告されても患者やお年寄りのためのボランティア活動に取り組んでいる小山さんの願いに立ったホスピスボランティアについて話し合いを行っている。ここでは，小山さんのホスピスにこめられた心を考えさせ，小山さんの生き方から「人にとっての喜びとは何か」について考えさせている。そして，ホスピスや老人ホームでのふれあい活動を継続し，「見つめる」段階（1時間）では，実践活動から学んだことを振り返るという授業の流れである。末期癌であり死を直面しながらも，人の役に立つ生き方をしたいという小山さんの生きる姿の尊さを感受し，自分も「人の役に立つことに喜びを感じて生きたい」という願いを持つことができることが目標となってい

表6　領域「人間」の年間計画の例（3年生）

	題材名	題材のねらい	視点
4月	1. ようこそ3年○組へ (4)	○よりよい学級生活のスタートをきることができる。	仲間
5月	2. ぼくらの夢を乗せて気球を飛ばそう (5)	○学級のシンボルを作るという「ものづくり」の活動を通して，仲間意識を育てる。	仲間
	3. お父さん，お母さんに心のプレゼント (3)	○父母へ敬愛を深め家族の一員として明るく楽しく家庭を作ろうとすることができる。	生命
6月	4. さくら組の友達とおかしをつくろう (4)	○さくら組の友達と心のつながりを深めていくことができる。	仲間
7月	5. 給食の残菜を減らそう (3)	○給食栄養士さんや調理員さんたちの工夫に感謝する態度をもつことができる。	生命
	6. 盲導犬の大切さを伝えよう (4)	○目が不自由な方の心を推し量り，自分ができるボランティアを行うことができる。	福祉
9月	7. 耳が不自由な方とのふれあい活動をしよう 前半 (4)	○耳が不自由な方と心がふれあう喜びを味わうことができる。	福祉
	8. 教生先生をお迎えしよう (3)	○教生先生を温かく迎えることができる。	仲間
10月	9. 楽しい学級をつくろう (4)	○自分たちの創意工夫を生かして楽しい学級づくりの自主的自発的な取り組みを行うことができる。	仲間
	10. 一人一鉢を大切にしよう (7)	○自然や動植物のすばらしさにふれ，自分の接し方を考えることができる。	生命
11月	11. 3年○組の宝物を作ろう (4)	○思いやりの心をもって，友達を助け合う心情を高めるとともに学級への誇りをもつことができる。	仲間
	12. 耳が不自由な方とのふれあい活動をしよう 後半 (4)	○耳が不自由な方との心が通い合う喜びを味わい真心をもって接することの大切さを自覚することができる。	福祉
12月	13. おとしよりに，心のプレゼントをおくろう (4)	○祖父母の敬愛する心を深め，家族の一員として明るく楽しい家庭をつくろうとすることができる。	生命
1月	14. おめでとう1996年 (4)	○自分の姿をみつめ，成長への意欲をもたせるとともに，新年の抱負を具体化することができる。 ○世界の子供たちのお正月の過ごし方を知り，異文化への興味・関心をもつことができる。	国際
	15. 心に残る本を探そう (2)	○自然や人の生き方の偉大さに感動する本を捜し味わい自分の生き方を比較することができる。	生命
2月	16. 長浜公園を守ろう (4)	○きれいな街づくりを行った自分の心情を振り返り，地球を大切にしようという意欲をもつことができる。	環境
3月	17. 4年生へ大きくはばたこう・思い出ビデオを作ろう (7)	○1年間の自分や学級の成長を確認し，充実感を味わうことができる。	仲間

る。自分がホスピスの患者であれば，何かを行いたくても自分のことで精一杯であるという認識と，希望する患者と一緒に老人ホームでボランティアを行いたい願いとの葛藤状況を引きおこさせ，人にとっての本当の喜びを考えさせている。内容的には，かなり重いものであるが，子ども達のボランティア体験（老人ホームでのふれあい）が人間としての生き方を考えることに深まりをみせており，成功した実践だと言えよう。教室内に留まる「道徳」の授業では，考え方の深化が見られない場合があるので，体験を通して学ぶことの重要性が窺われる。「道徳」と「特別活動」を統合した領域「人間」は，「総合学習」の１領域としての可能性があるように思われる。

(3)評価の方法

学校公開時の指導案では，評価項目が記載されていなかった。新教科や新領域についての評価は，まだ研究途上であると言えよう。

3 残された課題

本論文では，教科の統合による新教科の設置を行ったり，「生活・活動」を柱にした教科再編を行った福岡教育大学附属福岡小学校の事例を取り上げ，検討を行った。取り上げた「表現科」「生活環境科」“領域「人間」”は，いずれも体験重視の教科や領域であることが見いだされた。「表現科」と「生活環境科」は，子どもの発達段階に対応して設定されている点は，好感が持てる。教科の統合と分化は，子どもの発達に即して生じ得るが，このことはこれまで多くの研究者から言われてきたことである。

次に，新設された教科・領域が成立する可能性と課題について述べてみたい。「表現科」については，多くの「研究開発学校」で実践されたことからも実現の可能性は高い。しかし，単に「音楽」と「図画工作」を合科したものではなく，より広い学習内容や指導過程が含まれている。授業時数は，「音楽」と「図画工作」を併せたものであるが，取り上げられている内容は，身体表現や言語表現なども含まれ多岐にわたっている。ともすれば，「音楽」固有の，「図画工作」固有の指導内容が曖昧になり，各科の技能の習得が疎かになる危険性がある[2)]。「表現科」創設の意義の確認が必要であろう。

「生活環境科」については，前述したように体験を重視するあまりに，自然認識や社会認識の育成が希薄になる危険性を指摘することができよう。奉仕活動や健康・安全教育などは，「総合学習」の時間を設定し，その中で活動や学習を行った方が効果的ではないだろうか。中学年の「理科」「社会」の学習は身の周りの地域や環境を取り上げることが多いので，むしろ「生活環境科」を「理科」「社会」の合科とし，自然認識や社会認識の基礎を育成する教科とした方が良い。「生活科」→「生活環境科」→「理科」「社会」という発達段階に対応した教科の分化過程をとることが適切ではないだろうか。

“領域「人間」”は，概ね好感が持てる実践が多い。「道徳」的内容はかなり絞り込みが見られるが，学習するに際して価値ある主題を抜け落とさないよう留意する必要がある。「特別活動」的内容は，活動に時間を費やし，学習計画の変更をせざるを得ないものもある。調整のためのゆとりの時間の設定が必要であろう。ボランティア体験などの直接体験を通して，「道徳」的内容の学習の深化・発展を図ることができよう。

福岡教育大学附属福岡小学校の実践は，ドラスティックな教科の再編[3]ではなく，小規模な再編を行い実践したものである。“領域「人間」”も「総合学習」の1形態と捉えることができるが，さらに週当たり2〜3時間程度の「総合学習」[4]の時間を設定し，従来の教科の枠内には入りきれないものや教科横断的な学習を行う方が拡がりを持った学習になり望ましいのではないだろうか。「総合学習」の学習内容と新設された「表現科」「生活環境科」“領域「人間」”の学習内容との相互関連性を明らかにすることによって，福岡教育大学附属福岡小学校の目指している「認識と感性の統一的発達」の実現が図られるのではないだろうか。

註

1）例えば，東京学芸大学附属大泉小学校の場合，第1学年では標準時数の59%，第2学年では標準時数の72%，第3・4学年では標準時数の81%，第5・6学年では標準時数の78%となっている（藤岡，1997a）。

2）「研究開発学校」における「表現科」の実践を批判的に検討した論文としては，佐野・小山（1993）がある。佐野・小山は錦華小学校の「表現科」の実践を分析しているが，主として音楽科教育の視点から問題点を挙げている。それは，①「音楽」相当領域の指導内容，指導事項が曖昧なこと，②「鑑賞」の指導内容が削減されていること，③「音楽」相当領域に限らず，学習指導要領が示すよりも早い学年段階での指導を行おうとしていること，④「表現科」を設定する意味への根元的な疑問——の4点である。

3）小学校の「研究開発学校」における新教科・新領域の特徴と問題点をまとめた論文としては，藤岡（1997c）がある。大規模な教科の再編を行った事例として，福島大学附属小や錦華小を取り上げて検討している。

4）筆者は小学校の「総合学習」の実践校の実践を分析し，特徴と課題を明らかにした（藤岡，1997b）ので，参照されたい。また，教育課程審議会の答申でも，2002年度から「総合的な学習」の時間を週当たり3時間程度実施することが提言されている。「総合学習」についての研究は急務の課題になりつつある。

文　献

藤岡秀樹　1996　小学校における新教科の研究開発動向について（1）　岩手大学教育学部研究年報，**56**（1），139–152.

藤岡秀樹　1997a　小学校における新教科の研究開発動向について（2）　岩手大学教育学部研究年報，**57**（1），83–101.

藤岡秀樹　1997b　小学校における総合学習についての研究——実践校の分析を中心に——　岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要，**7**，205–222.

藤岡秀樹　1997c　小学校の教科再編の可能性と課題　教育目標・評価学会紀要，**7**，57–70.

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校　1997a　生きる喜びを生み出す教育課程の創造——子供主体の活動からみる教育課程の編成——　研究紀要 No. 28

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校　1997b　21世紀の教科・領域への挑戦　新時代の授業を創る　明治図書

福島大学教育学部附属小学校　1995a　研究紀要第29集　21世紀に生きる心豊かな人間を育成

する教育課程の創造
福島大学教育学部附属小学校　1995b　新時代の教育課程を問う　文部省指定『研究開発』の成果と課題
丸山信男・山田敦子・増田俊彦・門脇　正・田中義順　1996　新教科を構想する　錦華小の研究開発　ぎょうせい
三石初雄　1996　小学校教育課程再編の動き　佐藤年明（編）「生活科」における合科的教材の開発とその指導力量形成に関する研究　文部省科学研究費補助金研究成果報告書　15-30.
佐野　靖・小山真紀　1993　新教科モデルの特質と問題点　その内容分析を通して　季刊音楽教育研究，**77**，2-16.
東京学芸大学教育学部附属大泉小学校　1996　平成7年度研究紀要　豊かな学力の育成――『国際』『環境』『人間』総合単元の創造――
東京学芸大学教育学部附属大泉小学校　1997　平成8年度研究紀要　豊かな学力の育成――総合学習の創造――